

中島敦『弟子』論

―「徳を好む者」への死―

坂下文香

目次

はじめに

一、『弟子』をめぐる問題と視点

二、『徳を好む者』への死

三、『徳』と『色』の対立

四、思索する主体

おわりに

はじめに

中島敦の作品『弟子』は孔子の弟子・子路を主人公とした物語である。内容としては、子路が孔子に弟子入りするエピソードから始まり、祖国・魯を逐われた師に付き従い諸国を遍歴した後、晩年に仕官した衛の政変に巻き込まれて死ぬまでの彼の半生を描いたものとなっている。なお、この作品は著者没後に活字化され、『中央公論』昭和十八年二月号に掲載されたものが初出である。またその後の昭和二十一年二月十日、小山書店から刊行された『李陵』（文学新編4）に収録されたのが単行本としては最初のものである（注1）。

この作品について、すでに多くの先行研究が試みられている。

これまでの先行研究で主に扱われた『弟子』の問題とは、次の五点に集約される。まず第一に作品の十六章で子路を迎える死に様の意味づけ、その解釈に関する問題。第二に作品の主人公である子路が、いかなるキャラクターとして描かれているかを分析する人物像についての問題。第三は全十六章からなる作品の内容を、幾つかの部に分けて考察する構成についての問題。

第四は『弟子』に描かれた主題をめぐる問題。そして第五は『弟子』執筆の上で、典拠もしくは資料にされたと考えられる、『論語』をはじめとした漢籍との比較の問題である。これらの諸問題のいずれにウェイトを置いて論ずるにしても、従来の先行研究では一定の偏りの中で結論を述べている面が否めない。そこで本稿第一章では、こうした先行研究における諸問題を整理する。

続く第二章以下では、これら先行研究の問題点を踏まえた上で本稿が新たに提示したい三つのテーマについて論じていく。

まず本稿第二章では『弟子』十六章で描かれる子路の死に様、その意味について改めて解釈する。子路の死に様の意味につい

ては、これまで三つのパターンに分けられる解釈が主流であった。すなわち子路個人の生き様を貫いた末の死であったか、孔子の弟子たらんとして選ばれた死に様であったか、もしくはこの両者を融和させた上での死に様であったかという問題である。しかし、これら三つの解釈はどれも、すでに『弟子』十六章に至るまでに解消された問題を再び最後に据える形となり、作品の解釈の上でも発展性に欠ける。そこで本稿では、子路個人たることも、また孔子の弟子たることも超克した新たな人物像として「徳を好む者」の存在があることを提示する。子路の死に様は彼が「徳を好む者」として完成されるために必要であった死に様、つまり「徳を好む者」へと至る死であった。また、それと同時に『弟子』作中におけるもう一人の「徳を好む者」たる孔子へと宛てたメッセージとしての意味を持つ死でもあった。この二つの意味について、子路が死に際にとった「冠を正す」という行為を軸に、本稿の第二章では詳しく論究する。

次に本稿第三章では、子路の死に様の意味づけに大きな役割を担う『弟子』世界の基本構造、「徳」と「色」という二つの価値観が対立する構図について考察する。子路の死に様に「徳を好む者」への死という意味づけを行う際に、その対立概念である「色」の存在は欠かすことができない。のみならず『弟子』作中で繰り返し子路が孔子と共に遭う苦難の多くは「色」という価値観、その持つ力に支配された者たちがもたらすもので

ある。しかし同時に、子路は「色」の支配がもたらす苦難を乗り越えることによって段階を経て成長していく。その段階とは、子路個人としての倫理観の確立から始まり、孔子の弟子としての完成を経て、最後には「徳を好む者」として死に至るまで生き抜くという態度まで高められる。こうした子路の人物像を捉える上でも、また『弟子』世界を俯瞰する上でも大きな要素を担う「徳」と「色」との対立の構図は、これまで明確に取り上げられることなく見過ごされてきた。そこで本稿の第三章では、『弟子』作中で繰り返し返される「徳」と「色」の対立の構図を明らかにし、それが生み出す世界観と「徳を好む者」へと至る子路の成長の流れを明らかにする。

そして本稿第四章では、作品全体の主題について「思索する主体」というキーワードを基に考えていく。このキーワードは後に詳しく論ずるが山敷和男氏の論文（注2）における指摘に示唆を受けたものである。『弟子』の中において、「思索する主体」である子路は客体である孔子の教えを取り込みつつも、それと自己とのあらそいの結果、新たに「徳を好む者」という生き方と死に様を生み出している。同時にこうした子路の姿そのものが、「思索する主体」である中島敦という作家が『論語』などの典拠という客体を取り込み、結果として『弟子』という新たな作品を生み出したのだという構図も指摘できる。更には作中の主人公という「思索する主体」と他の登場人物という客体の

ぶつかりあいから生まれる新たな価値観、作家という「思索する主体」と典拠という客体の混淆の中から生まれる新たな作品というミクロからマクロへの発展の図式を、読者という「思索する主体」と作品という客体との接触によって新たに生み出される読者の思索という形にまで展開し得る。それこそがこの作品の主題であつたのではないかと本稿の第四章では論考する。

これら三つのテーマの論究によって、『弟子』における新たな解釈の方向性を提示することが本稿のねらいである。

なお、本稿で引用した『弟子』のテキストは筑摩書房刊『中島敦全集1』（二〇〇一年）をもとに、筑摩文庫『中島敦全集3』（一九九三年）に収録されたものを参照して、漢字のみ常用漢字に改めた。

一、『弟子』をめぐる問題と視点

これまでの先行研究で挙げられてきた『弟子』をめぐる論の焦点としては、以下の五点が挙げられる。第一に作品の最終章で子路が迎える死に様の意味づけ、その解釈に関する問題。第二に作品の主人公である子路が、いかなるキャラクターとして描かれているかを分析する人物像についての問題。第三に全十六章からなる『弟子』の作品構成についての問題。第四に『弟子』そのものが描こうとした作品の主題をめぐる問題。そして第五は作品と典拠との比較における問題である。

まず、第三に挙げた作品構成の問題については『弟子』の内容を三部、もしくは五部に分けて考える方法が先行研究の中で幾つか試みられている。その代表的なものをまとめると以下の通りである。

（1）木村一信氏の三部構成説（注3）

木村氏は一章から五章を第一部、六章から十三章を第二部、十四章から十六章を第三部としている。そして、この各部はそれぞれ、第一部が子路像の造型、第二部が諸国遍歴、第三部が子路の晩年という内容となっていると分類されている。

（2）藤村猛氏の三部構成説（注4）

藤村氏の分類では一章から五章が第一部、六章から十二章が第二部、十三章から十六章が第三部となっている。その上で第一部を子路の人格形成のドラマ、第三部を子路の生死のドラマと捉える。そして第二部は前後二つの部を繋ぎ、作品としての一貫性を強化する役割を果たしていると述べられている。

（3）張娜麗氏の三部構成説（注5）

張氏は各部の内容については、先に（1）で挙げた木村氏とほぼ同じ観点を持っている。ただし各部の境目となる章について、前後どちらの部に含めるかが異なっている。張氏の分類では一章から六章が第一部、七章から十三章が第二部、十四章から十六章が第三部となっている。

（4）秋元誠氏の五部構成説（注6）

秋元氏は子路と孔子の関係性に重点を置き、全体を五部構成と見ている。秋元氏の分類では一章が発端（プロローグ）、二章から七章が展開Ⅰ（序）、八章から十二章が展開Ⅱ（破）、十三章から十五章展開Ⅲ（急）、十六章が結末（クライマックスとエピローグ）という五部構成になっている。各部の内容については次のようにまとめられている。第一部では子路と孔子の出会い。第二部は異質なものを内に含みつつも師の敬愛を深める過程。第三部は敬愛の中にも対立するきざしを見せ始める過程。第四部は子路流孔子世界の完成と、それゆえに師との深い溝が顕在化する過程。第五部は子路の憤死と孔子の悲嘆である。

しかしながら、こうした部立てに区分する考え方は、論者が作品を任意に分断することによってその各部にとらわれ、逆に最終章へと収束していく作品全体の流れを把握する上での妨げとなる可能性も否定できない。従って本稿では、このような形で作品構成の問題を扱わない。部立てに区分する考え方にこだわらず作品全体の流れを追ひ、各章に張り巡らされている伏線から、その他の問題に関する結論を明らかにすることを目的とした。

次に、第二に挙げた子路の人物造型については、先行研究において解釈に三つの類型が見られる。師・孔子との関係を軸に据え、結果として子路の個性が師と対立したか、同化（もしくは親和）しようとしたか、両者が融和したかの三パターンの解

釈である。

（１）師と対立した子路の個性

これはすなわち遊侠の徒、あるいは形式主義に對する忌避を貫いた姿と言ひ換えることもできる。この解釈の代表的な論として、秋元誠氏（注７）は子路の死に縁を「孔子の思想の唯一の弱点に刃を突き立て、そして果てた」と規定している。その上で『弟子』の物語を「（行為者）弟子Ⅱ子路と（認識者）師Ⅱ孔子の対立と親和のドラマである」と述べている。その他、佐々木充氏（注８）は子路の姿を「孔子の思想を、おのれに課された一つの枠としてあえて身に受け、その枠とあらがう形で自己の本性を確認しようとする、爽快な男の生き方」と指摘している。

（２）師と同化（もしくは親和）しようとした子路の個性

これは言い換えるなら子路の孔子の弟子としての姿と述べることもできよう。この解釈の代表的な論として、木村東吉氏（注９）は子路の姿を「孔子と自己とを一体化している」と捉える。また、奥野政元氏（注１０）は「子路は孔子を超えることはない」とし、子路の姿を「むしろ永遠の弟子たらんとさえしている」と指摘している。

（３）師と融和した子路の個性

これはいわば孔子の弟子たる中に子路独自の遊侠の魂を融合させた姿と表現することもできる。この解釈の代表的な論として、渡辺義雄氏（注１１）は「子路は孔子の弟子となり、遊侠の魂

と義の理念を結合する形で自己を高めていった」と指摘している。

このように先行研究では子路独自の魂を貫いたか、あくまで孔子の弟子にとどまったか、もしくはその二つの立場を融合させたものであったかという三つの解釈に分かれている。

しかし本稿では新たに、子路および孔子には「徳を好む者」という人物像を見出せると指摘する。『弟子』の中で最初に子路は「長剣を好む者」として登場する。そこから子路は孔子に弟子入りし、師の下で様々な学びつつ最終的には、「子路個人」「孔子の弟子」というだけにとどまらない「徳を好む者」へと成長を遂げていく。

また、孔子は子路を「長剣を好む者」から「徳を好む者」へと導く師であった。しかし、子路の成長と共に最後には「徳を好む者」として互いに切磋琢磨する存在となっていく。二人の立場は「徳を好む者」という属性の上では一致している。だが、その「徳を好む者」として実現すべき究極のスタイルとしては理想を違えている。この違いこそが師弟を互いに切磋琢磨させ、同時に子路を死へと導く原因ともなっていたと考えられる。

次に、第一に挙げた子路の死に様の意味づけについては、これも先行研究において先に見た子路の人物像と対応する形で三つのパターンに分類される。

(1) 子路自らの信念に殉じた死

これは「孔子との対立」に対応した死の意味づけであると言える。この解釈の代表的な論として、すでに挙げた秋元誠氏のもの、佐々木充氏(注12)は「明哲の師孔子を字義通りの範型として追隨するのではなく、それをおのれに課された優れた粹とし、それに対してあえておのれの異をたて続けた」と捉えている。また、山下真史氏(注13)は「子路の最期の絶叫は、彼ら(坂下注・クーデター一味、および群衆)に(正義派)の存在と(仁)(義)の実践とを訴えたもの」であるとし、同時に「身を棄てて義を成してこそ(君子)と言えるのではないかと孔子に問うた」のだとしている。その他、宮田一生氏(注14)は「己れにこだわらず、己れの性情、愚かさに殉じた姿として理解すべき」だと指摘している。

(2) 孔子の弟子としての子路の死

これは「孔子との同化(もしくは親和)」に対応した死の意味づけであると言える。この解釈の代表的な論として本田孔明氏(注15)は子路は「孔子の『弟子』として死ぬことを選んだのだ」と指摘。その死に様を「ひとりの人間が(死)をもつてして、ある固有のイデオロギー装置の中に組み込まれてゆく過程」と捉える。また「その人間が装置の中にはなく、残された者の幻想の中で生き続けることの可能性」が描かれているのだと述べている。

(3) 孔子の弟子でありつつ子路自身の流儀をも貫いた形での

死

これは「孔子との融和」に対応した死の意味づけであると言える。この解釈の代表的な論として渡辺義雄氏（注16）は「冠を正して絶叫するのは、師に習って後世に義を示すためではなかったか。子路は孔子から学びとったものを、彼の流儀で実践したのである」と述べている。

これら先行研究の解釈の共通点としては、子路の死に様の意味づけが、子路個人の信念や孔子の弟子としてといった、限定された範囲に留まるものとなっている点が挙げられる。しかし、これらのどの意味づけを取るにしても、既に『弟子』作中で十六章に至るまでに乗り越えられた問題を再び最後に据える形となる。その結果として子路の死に様が意味の上で更なる展開を見せず、後退した形で纏まってしまいう問題点が指摘される。

そこで本稿では、子路の死に様は子路個人の信念、もしくは孔子の弟子たることにみに限定されない、更に発展した姿としての意味づけを行う。それが「徳を好む者へ至る死」である。また同時に、これは子路と同じく「徳を好む者」である孔子に宛てたメッセージ性を持つ「徳を好む者への死」でもあったことを指摘する。

続いて、第四に挙げた作品の主題についてであるが、これにも二通りほどの傾向を先行研究の中に指摘できる。

（1）子路という人物や、その人間関係を描くことが主題

まず挙げられるのは主人公である子路や、彼と師・孔子の築く人間関係に着目して作品の主題を求めた論である。この観点に立つ代表的なものとして廖秀娟氏（注17）は「子路の姿こそが『弟子』の主題」としている。また、「弟子というのは師の教えを受けることに留まらず、師から離れ、その受けた教えを実践に移すのも弟子としての務めであろう」と述べた上で、「孔子から受け継いだ使命を機軸として、子路は世俗へ、自分の運命へと向かって歩み出した」と指摘している。その他、古山芳枝氏（注18）は「関係性」そのものが主人公ともいえるドラマチックな物語」と捉え、『弟子』は「作中人物に仮託して自己内部の葛藤を人間どうしの葛藤、すなわち社会的「関係」の一つのあり様という外的ドラマにまで昇華せしめた作品」と述べる。その上で孔子と子路の関係を「大きな個性と個性とがぶつかりあって生じる葛藤、そして融和の交流」と位置づけている。

（2）人と、それが接するより大きな対象に関わる問題が主題
これに対し、作品の主題を主人公・子路をはじめとする作中人物の關係にのみ固定せず、より大きな対象にまで拡大して解釈する論がある。この観点に立つ代表的なものとして、藤村猛氏（注19）は「重い現実の中での、一個人の思うがままの望ましい生き方」を描く、「拡大して言えば、『歴史』と『個人』の存在の有り様を追求したもの」と指摘している。その他、山下真史氏（注20）は「自分の行為が明瞭な〈快〉に繋がっているか、

〈全身的〉な理解に基づくものかどうかを問ひかけた作品」と述べている。

これらの論を踏まえた上で、確かに『弟子』の主なストーリーが子路の姿や彼をめぐる人間関係を中心に描かれている点は否めない。しかしそれが作品の主題であるという見方には疑問が残る。子路をめぐる人間関係と、それによって成長していく彼の姿を描くことによつて、更に大きな問題のメタファーが作品の主題として置かれていたのではないかと本稿では考える。

作品の主題を捉える視点で述べられたものではないが、山敷和男氏(注21)はその論文において「思索する」とは主体が対象を自己の中にとりこみ、自己内で主体と客体(対象、この場合でいえば事件)とが火花をちらしてあらそい、その結果として、そこから新しい生(新しい対象、結論)が生まれてくることではないか」と指摘されている。本稿では、この指摘に示唆を受け、「思索する主体」としての子路が対象である孔子の教えを自己の中に取り込み、その二つが彼の中で火花を散らしてあらそった結果、新たに生みだされた「徳を好む者」の生き方と死に様があつたことを見る。その上で、こうした子路の姿そのものが、「思索する主体」である中島敦という作家が『論語』などの典拠という客体を取り込んだ結果として、『弟子』という新たな作品を生み出したという構図も指摘できる。また同時に、作中での「思索する主体」と客体のぶつかりあいから生まれる新

たな価値観、作家という「思索する主体」と典拠という客体の混淆の中から生まれる新たな作品という図式を、更に読者という「思索する主体」と作品という客体との接触によつて新たに生まれる読者の思索という形にまで展開し得る。それこそがこの作品の主題であつたのではないかと本稿では考える。

最後に第五で挙げた典拠と作品との比較における問題であるが、これは佐々木充氏(注22)をはじめとして村田英明氏(注23)や李俄憲氏(注24)、張娜麗氏(注25)らの手によつて詳細な研究が行われている。しかし典拠との異同を探る試みが、作品そのものへの解釈や主題の追求につながっていないという問題点も指摘できる。そこで本稿では、あえてその問題点の指摘のみにとどめ、典拠との比較を必要がない限り行わないという姿勢を保ちたい。

従来の先行研究の中からまとめられる問題点と、それに対する本稿での基本的な視点は以上である。

二、「徳を好む者」への死

子路の死に様として従来、最も多く問題とされた部分は以下の「冠を正す」子路の姿である。

敵の戟の尖端が頬を掠めた。纓(冠の紐)が断れて、冠が落ちかかる。左手でそれを支へようとした途端に、もう一人の敵の剣が肩先に喰ひ込む。血が迸り、子路は倒れ、冠が落ちる。倒れながら、

子路は手を伸ばして冠を拾ひ、正しく頭に着けて素速く纓を結んだ。敵の刃の下で、真赤に血を浴びた子路が、最期の力を絞つて絶叫する。

「見よ！ 君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！」

全身を膺の如くに切り刻まれて、子路は死んだ。『弟子』十六章

先行研究では、この子路の「冠を正す」という行為は、そこから導かれる結論の差違に関わらず、例えば本田孔明氏（注26）が指摘されるように「結局のところ、冠を正して死ぬことは「礼」につくこと」、つまりは孔子の教えに則る「形」に就いた行為であると規定するところから各種の論が展開されている。

しかしこの「冠を正す」行為が孔子の教えに則った「形」であるとするなら、そうすることで出される結果は既に先の十四章章において、子路は最大のものを提示している。次の場面である。

子路の仕事は孔家の為に宰として蒲の土地を治める事である。（中略）

三年後、孔子が偶々蒲を通つた。先ず領内に入つた時、「善い哉、由や、恭敬にして信なり」と言つた。進んで邑に入つた時、「善い哉、由や、忠信にして寛なり」と言つた。愈々子路の邸に入るに及んで、「善い哉、由や、明察にして断な

り」と言つた。『弟子』十四章

こうした十四章を踏まえて見ると、「冠を正す」行為は子路が孔子の教えを成就させた形であると見るのは単なる繰り返しになり、発展性にも欠ける。

この他、「己れにこだわら、己れの性情、愚かさに殉」じた姿として理解すべき」とする宮田一生氏（注27）の指摘にもあるように、子路個人の信念に基づいた死に様であると捉える見方もある。しかし、こうした捉え方には次の場面を挙げて異を唱えたい。

群衆の間に交つて子路も此の様子を見た。公からの使を受けた時の夫子の欣びを目にしてゐるだけに、腸の煮え返る思ひがするのだ。何事か嬌声を弄しながら南子が目の前を進んで行く。思はず嚇となつて、彼は拳を固め人々を押分けて飛出さうとする。背後から引留める者がある。振切らうと眼を瞋らせて後を向く。子若と子正の二人である。必死に子路の袖を控へてゐる二人の眼に、涙の宿つてゐるのを子路は見た。

子路は、漸く振上げた拳を下す。『弟子』九章

靈公からの招きに応じた際、南子夫人の横槍によつて孔子が辱めを受ける場面である。この時、子路が一度は振り上げた拳を下ろしたのは何故であつたか。子路があくまで己にこだわら、愚かとわかつていても結果を省みず個人の信念のまま行動に移る人物であつたなら、後輩から引きとめられたとしても彼は南

子夫人めがけて殴りかかっていただろう。しかし子路にそうさせなかったのは、自身の怒りや憤懣を晴らすより優先させるべきものが彼の中に芽生えていたからではないだろうか。この場面において少なくとも子路は「己」という個人の性情や愚かさを乗り越えていたのだと指摘する。

また「冠を正して絶叫するのは、師に習って後世に義を示すためではなかったか。子路は孔子から学びとつたものを、彼の流儀で実践したのである」と指摘する渡辺義雄氏（注28）の論もある。子路個人と孔子の弟子たることを融和させて捉える見方には賛同できるが、やはりそこから止揚された、より高次の視点が欲しい。

このようにして見ると「冠を正す」あるいは「冠」とは孔子の教えに従った「形」ではなく、子路が生涯をかけて守り、貫き通そうとした「徳」の象徴ではないかと考えられる。そのため子路は何があっても「冠」を落とそうとはせず、死に至るまで「冠」を守り通し、最期には「冠を正す」ことによって「徳」の下に立つことを貫く、「徳を好む者」としての死に様を天下に知らしめようとしたのではないかと指摘できる。

また、こうした子路の死に様を受けた孔子の反応も、それを裏付けるものである。

子路の屍が醢にされたと聞くと、家中の塩漬類を悉く捨てさせ、爾後、醢は一切食膳に上さなかつたといふのである。（『弟子』十

第六章

この態度は単に師が愛弟子の死を悼むというだけの行為ではない。「徳を好む者」としての生き様、そして死に様を示した一人の人間に対する処遇として、その屍肉を醢にするという行為が相応しいものではないと孔子が考えた故の、抗議の行動であると考えられる。

こうして子路の死は「徳を好む者」の究極の完成型を示す一つの形として示され、またそれはもう一人の「徳を好む者」たる孔子へと伝えられ、その生涯に渡って受け継がれるものとなったのである。

三、「徳」と「色」の対立

「徳を好む者」を導き出す重要な構図として、作中では繰り返し「徳」と「色」の対立が語られている。その最初の対立の場面が以下に引用する第六章のエピソードである。

齊から魯へ贈るに、歌舞に長じた美女の一人を以てしたのである。斯うして魯侯の心を蕩かし定公と孔子との間を離間しようとしたのだ。（中略）魯侯は女樂に耽つて最早朝に出なくなつた。季桓子以下の大官連も之に倣ひ出す。（中略）

孔子の粘り強さも竟に諦めねばならなくなつた時、子路はほつとした。さうして、師に従つて欣んで魯の国を立退いた。

作曲家でもあり作詞家でもあつた孔子は、次第に遠離り行く

都城を顧みながら、歌ふ。

彼的美婦の口には君子も以て出走すべし。

彼的美婦の謁には君子も以て死敗すべし。……………

斯くて爾後永年に亘る孔子の遍歴が始まる。(『弟子』六章)

こゝでまず孔子および子路は、仕える君主である魯公を捕らえた「色」に敗北を喫している。そればかりか、これが原因となつて諸国遍歴の旅に出ざるを得なくなつていたのである。しかし同時に、この諸国遍歴は子路と孔子の師弟が重んずる「徳」という価値観が魯という一国にとらわれない成長を始める端緒ともなつてゐる。逆に「徳」という価値観をもとに政治を刷新し国力を充実させていく魯に、斉の重臣たちが危機感をおぼえるとの形で、「色」に対立する「徳」という価値観の可能性を示唆している場面との指摘もできるだろう。

続いて子路と孔子の掲げる「徳」が「色」と対立するのは九章においてである。

一日、靈公の所から孔子へ使が来た。車で一緒に都を一巡しながら色々話を承らうと云ふ。孔子は欣んで服を改め直ちに出掛けた。

(中略)

孔子が公に謁し、さて表に出て共に車に乗らうとすると、其処には既に盛装を凝らした南子夫人が乗込んでゐた。孔子の席が無い。南子は意地の悪い微笑を含んで靈公を見る。孔

子も流石に不愉快になり、冷やかに公の様子を窺ふ。靈公は面目無げに目を俯せ、しかし南子には何も言へない。黙つて孔子の為に次の車を指さす。

二乗の車が衛の都を行く。前なる四輪の豪華な馬車には、靈公と並んで嬋妍たる南子夫人の姿が牡丹の花のやうに輝く。後の見すばらしい二輪の牛車には、寂しげな孔子の顔が端然と正面を向いてゐる。治道の民衆の間には流石に秘やかな嘆声と響聲とが起る。

(中略)

翌日、孔子等の一行は衛を去つた。「我未だ徳を好むことを好むが如き者を見ざるなり。」といふのが、其の時の孔子の嘆声である。(『弟子』九章)

諸国遍歴中に訪れた衛でも靈公を捕らえて離さぬ南子夫人という「色」の象徴に邪魔をされ、孔子一行は再びこの国を出ざるを得なくなるのである。この九章の構図も一見して六章での対立の構図と相似していることがわかるだろう。しかし、こゝで六章よりも九章の方が、「徳」が対立する相手としての「色」の難敵度が増している。それというのも、「色」という価値観を持つ存在が、一国の夫人という権力を既に手にしているからである。

この構図は、他国という外部から「色」という「徳」と対立

する価値観が送り込まれた六章に対し、もはや九章では各国の中樞を最初から「色」の力が侵食しつつある世界観の進展を示している。だが、それと同時に対立する「徳」も表面上は敗北を喫しながらも、次第にレベルを上げて成長しつつあることを示している。たとえば、引用の箇所（中略）とした後者には先に挙げた子路の拳を振り上げて下ろすシーンが該当するが、このひとつをとっても子路が個人の限界を乗り越えるという成長を見せている。また同時に、一國の中樞を蝕むほどの「色」と対立し得るまでに、子路と孔子が掲げる「徳」の格も上がっているのだという見方もできる。

このような対立の図は物語の終幕、十六章でも再び基本の構造として描かれている。

子路が魯に来てゐる間に、衛では政界の大黒柱孔叔圉が死んだ。其の未亡人で、亡命太子蒯聵の姉に当る伯姫といふ女策士が政治の表面に出て来る。一子愷が父圉の後を嗣いだことにはなつてゐるが、名目だけに過ぎぬ。伯姫から云へば、現衛侯輒は甥、位を窺ふ前太子は弟で、親しさに変りはない筈だが、愛憎と利慾との複雑な経緯があつて、妙に弟の為ばかりを計らうとする。夫の死後頻りに寵愛してゐる小姓上りの渾良夫なる美青年を使として、弟蒯聵との間を往復させ、秘かに現衛侯逐出しを企んでゐる。《弟子》十六章）

こうして子路がその生涯で最後の戦場となる、仕官後の衛に

おいても伯姫という「色」の化身が後押しするクーデター派と子路は戦わねばならない構図になつてゐるのである。この場面では既に「色」は一國の実権を握つてゐる。九章における南子夫人のように、中樞にはたらきかけて「徳」の活動を妨げるのみにとどまらない。もはや子路の掲げる「徳」は「色」が動かす一國と対峙しなくてはならないのである。

しかし、「色」の牛耳る衛という一國に相對する子路も、「徳」の担い手としてそれにふさわしい成長を、この十六章に至るまでに遂げている。それは一國にとらわれない生き方も然り、己という個人を貫くことにのみ固執しない考え方と行動も然り、そして孔子の弟子としての完成も然りである。このような成長を経た上でお、より強大な相手となつた「色」と対決することとなつた子路は、その死に様によつて更なる「徳」の担い手としての進化を遂げる。それが「徳を好む者」としての姿である。かつて十六章で師・孔子が「我未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり。」と嘆いた、その言葉に報いるように子路は、同じ衛の國で「徳を好む者」としての生き方、そして結果としての死に様を見せることによつて、師弟の間で守り伝え磨き上げてきた「徳」の姿をひとつの形として示したのである。

四、思索する主体

中島敦の作品を論ずる際、「己」という問題は繰り返し扱われ

てきたテーマである。しかもその「己」とは単なる存在としての個にとどまらず、懷疑や執着などをもって世界や人々の間を逍遙する「思索する主体」としての自己、あるいは自我である。

ここで、繰り返しになるが重要な指摘であるので再び引用したい。作品の主題を捉える視点で述べられたものでないが、山敷和男氏(注29)は「思索する」とは主体が対象を自己の中にとりこみ、自己内で主体と客体(対象、この場合でいえば事件)とが火花をちらしてあらそい、その結果として、そこから新しい生(新しい対象、結論)が生まれでてくることではないか」と述べられている。

この視点に立つて見た際、中島の他の作品、たとえば『悟浄出世』『悟浄歎異』の主人公・悟浄と『弟子』の主人公である子路とは、その「思索する」という状態において明らかに一線を画していることがわかる。悟浄は懷疑を持ち、その問いの答えを求めて流砂河の底を賢者を求めて訪ね歩き、また師・三蔵の後に付き従って行くが、彼なりの「新しい生」といったものを生み出すには至っていない。また、師や兄弟子たる悟浄をはじめとする他者の考え方、行動などに思いをめぐらせることはあっても、それを悟浄自身の中に取り込み、内部で葛藤を生じるまでに悩み抜くといった態度にも至っていない。その意味でなら悟浄は、「思索する主体」としては未完成の主人公と言える。

これに対し、子路は時に師・孔子が手を焼き、所によつては

諦めてしまうまでに師の教えと葛藤し、同時に師に絶賛されるまでの弟子としての完成をも示す。子路は己の持つ考えと異なる考え、価値観を持つ者と対峙した際、それとあらそうことを辞さない。かならず自らの中に引き寄せて考え、内部で葛藤しつつも新たな結論を出そうと動き続ける。こうした子路の姿こそ、中島が『弟子』に至るまでの作品で幾度か試みては未完成に終わった、「思索する主体」としての主人公の完成像であったのではないか。

『弟子』における、まずひとつめの主題として、このような「思索する主体」としての子路の創造があつたことを否定しない。しかしより大きな主題が後に控えていることも、本稿では提示したい。そこでふたつめに指摘するのは、この子路の姿に二重写しになって捉えられる、作家・中島敦と『弟子』の典拠となつた数々の漢籍との関係である。多くの先行研究が示す通り、中島は『弟子』に多く『論語』の文言や漢籍の記事に基づくエピソードを織り込んでいる。他方で中島は典拠や資料に存在しない、独自の着想と思われるエピソードも巧みに混ぜ込んでいる。

こうしたスタイルで書かれた『弟子』という作品そのものが、「思索する主体」である中島敦という作家が、『論語』などの典拠という客体を取り込み、結果として『弟子』という新たな作品を生み出した、そのひとつの形であると言つてもよいだろう。

子路が作中で孔子の教えや隠者の老人の考え方と己の信念とを葛藤させながら、新たに「徳を好む者」としての生き様を最後に生み出したように、中島も己の創作的な発想と典拠や資料という客体とを競合させながら『弟子』という新たな作品を生み出したと考えられるのである。

このような図式を踏まえた上で更にもう一段階、進んだ主題の中島は『弟子』という作品にこめていたのではないかと本稿では指摘したい。それは読者という「思索する主体」と作品という客体との接触によって新たに生まれる、読者の思索を期待する構造である。

中島が作家生活を送った晩年の昭和十七年は、太平洋戦争の真っ直中でもあった期間である。中島自身も南洋庁の職員として、パラオをはじめとする南洋諸島に赴任し、内地で伝えられる戦争の状況と実際の姿が食い違っていることを肌で感じていたことであろう。南洋から家族へ宛てた書簡の中でも、そのような発言は散見される。そうした状況の中で「己」にこだわる作品を何度か試みていた中島は、自己が主体として思索するということとはどういうことかを考え、また各人が外部からもたらされる情報に隔らされることなく己自身で思索・判断する必要性を痛切に感じ取っていたのではないだろうか。

中島が戦争反対者であったとは言いきれない。しかし、だからといって盲目的に戦争を支持し、国体を礼賛する立場にあつ

たとも考えにくい。自己の南洋行という経験や蓄えた知識、そしてなにより「思索する主体」であるという故に、中島は絶えず個人と世界の情勢、国の状況を己の中に取り込み、葛藤させて新たな結論を生み出そうと試み続けていたのではないだろうか。

また、そうした「思索する主体」たることを己に課すのみならず、他の人々にも重要な態度として訴える必要性も視野に入れていたのではないか。断筆となったエッセイ『章魚木の下で』などは、そのような中島の意図をうかがわせるに十分な材料であろうと考えられる。

『弟子』は一見して、『論語』にはじまる孔子や子路の漢籍から取材した物語であると知れる。読者は中島の提供する物語をそのまま享受して読む他に、各自で典拠や資料と思われる漢籍をあたり、そこから作品との異同を考察することによって、中島が作品にこめた意図を探ることもでき、また同時に新たな独自の子路観や孔子観、『論語』観や倫理観などといったものにまで思索を展開することもできよう。そうした客体としての作品を世に示すことが『弟子』の主題のひとつであり、また同時に作品の内容・それが描かれた過程までも読者の思索を促す大きな仕掛けとしての作品を創作することを、中島はこの『弟子』という物語の主題に含めたのではないかと指摘する。

おわりに

これまで五百あまりの先行研究が中島敦の作品については行われている。しかし今なお中島敦の文学史上の位置づけや、作家総体としての姿の把握、そして個々の作品の解釈についても研究の余地を残している。現在でも高等学校の教科書や副読本の教材として使用される中島敦の作品を、現代において新たに読み解き、解釈するひとつの指標として本稿では作品『弟子』を扱い、その中で新たに三つのテーマを提示した。

今回の論では深く触れることなかった中島敦の他の作品と『弟子』との関係、また他の作家の作品との比較における中島作品の位相については今後の研究課題としたい。

—注—

(注1) 『中島敦全集1』中島敦(筑摩書房 二〇〇一年十月十日) 解題
および『中島敦全集3』中島敦(筑摩書房/筑摩文庫 一九九三年五月二十四日) 解題を参照。

(注2) 山敷和男氏の論文「中島敦の『弟子』について」(『比較文学年誌』第八号 早稲田大学比較文学研究室 一九七二年三月) 参照。

(注3) 木村一信氏の著書『中島敦論』(双文社出版 一九八六年二月二十二日) 所収、『弟子』論——「己が性情」への指向——参照。

(注4) 藤村猛氏の論文「弟子」試験」(『安田女子大学紀要』十六号 安田女子大学 一九八八年二月) 参照。

(注5) 張娜麗氏の論文「中島敦の歴史小説——『弟子』」(『学苑』第五八一号 昭和女子大学近代文学研究所 一九八八年五月) 参照。

(注6) 秋元誠氏の論文「中島敦『弟子』考——その劇的なもの」(『富山工業高等専門学校紀要』第二十五号 富山工業高等専門学校 一九九一年三月) 参照。

(注7) 注6に同じ。

(注8) 佐々木充氏の著書『中島敦の文学』(桜楓社 一九七三年六月二十日) 所収、『弟子』——おのれを支えるもの——参照。

(注9) 木村東吉氏の論文「中島敦『弟子』論——行動者の救済とその限界」(『国語と国文学』第六十六巻第十二号 東京大学国語国文学会 一九八九年十二月) 参照。

(注10) 奥野政元氏の著書『中島敦論考』(桜楓社 一九八五年四月二十五日) 所収、『弟子』——他者との出会い——参照。

(注11) 渡辺等雄氏の論文「中島敦の世界 第四回 『弟子』ノート(下)」(『月刊国語教育』第十五巻六号 東京法令出版 一九九五年八月) 参照。

(注12) 注8に同じ。

(注13) 山下真史氏の論文「中島敦『弟子』論」(『中央大学文学部紀要』第九十三号 中央大学文学部 二〇〇四年三月) 参照。

(注14) 宮田一生氏の論文「中島敦『弟子』論」(『日本文芸研究』第四十八巻四号 関西学院大学日本文学会 一九九七年三月) 参照。

(注15) 本田孔明氏の論文「中島敦『弟子』論——もう一つの『歴史』小説

のために『立教大学日本文学』第七十三号 立教大学日本文学会

九九四年十二月 参照。

(注16) 注11に同じ。

(注17) 廖秀娟氏の論文「中島教『弟子』論」『待兼山論叢(文学篇)』

三十六号 大阪大学大学院文学研究科 二〇〇二年十二月二十五日 参

照。

(注18) 古山芳枝氏の論文「中島教『弟子』論——『過去帳』から『弟子』

へ」『日本文学ノート』第二十七号 官城学院女子大学日本文学会

九九二年一月 参照。

(注19) 注4に同じ。

(注20) 注13に同じ。

(注21) 注2に同じ。

(注22) 注8に同じ。

(注23) 村田英明氏の著書『中島教『弟子』の創造』(明治書院 二〇〇

二年十月十二日) 参照。

(注24) 李俄憲氏の論文「中島教『弟子』とその典拠」『現代社会文化研

究』No.15 一九九九年九月 参照。

(注25) 注5に同じ。

(注26) 注15に同じ。

(注27) 注14に同じ。

(注28) 注11に同じ。

(注29) 注2に同じ。

——主な参考文献——(ただし本文・注で引いたものは除く)

・書籍

『中島教全集1~3・別巻』中島教(筑摩書房 二〇〇一年十月十日~二

〇〇二年五月二十日)

『中島教全集1~3』中島教(筑摩書房/筑摩文庫 一九九三年一月二

一日~一九九三年五月二十四日)

『弟子 自筆原稿復刻』中島教(中島教の会 二〇〇二年十月十二日)

『中島教書誌 近代文学書誌大系4』斎藤勝(和泉書院 一九九七年六

月三十日)

『中島教——近代文学資料1——』佐々木充(桜楓社 一九六八年三月

五日)

『中島教の作品研究』濱川勝彦(明治書院 一九七六年九月五日)

『中島教研究』中村光夫・氷上英廣・郡司勝義 編(筑摩書房 一九七八

年十二月二十五日)

『中島教論——「狼疾」の方法』鷺只雄(有精堂 一九九〇年五月二十五

日)

『昭和作家のクロノトポス 中島教』勝又治・木村一信 編(双文社出版

一九九二年十一月十日)

『中島教研究』藤村猛(溪水社 一九九八年十二月二十日)

『求道者の文学 中島教論』清水雅洋(文芸社 二〇〇二年一月十五日)

『論攷 中島教』木村瑞夫(和泉書院 二〇〇三年九月二十四日)

『中島教 注釈 鑑賞 研究』平林文雄(和泉書院 二〇〇三年三月二十

日)

『中島教論』渡邊一民(みすず書房 二〇〇五年三月二十三日)

『評伝・中島教——家学からの視点』村山吉廣(中央公論新社 二〇〇二年九月十五日)

・雑誌論文

『弟子』の世界——愚直へのご共感と自己止揚——木村一信(『人文論究』第

二十二巻第四号 関西学院大学人文学会 一九七三年三月)

『弟子』の基軸——越智良二(『国文学攷』第六十八号 広島大学国語国文学会 一九七五年八月)

『中島教』『弟子』制作過程について——竹腰幸夫(『常葉国文』六号 常葉

女子短期大学国文学会 一九八一年六月)

『中島教』『弟子』論——『過去帳』から『弟子』へ——古山芳枝(『日本文学

ノート』第二十七号 宮城学院女子大学日本文学会 一九九二年一月)

『特集・宗教と文学』作家にとって(『信』)とは何か 中島教における(『信』)

木村一信(『叙説』第七号 叙説舎 一九九三年一月)

『中島教の世界』第一回(第六回) 渡辺善雄(『月刊国語教育』第十五巻
三号・八号 東京法令出版 一九九五年五月・十月(連載))

『中島教論からの3章』冲野厚太郎(『文芸と批評』第八巻第二号 文芸
と批評同人 一九九五年十一月)

『一片の水心を持つ——中島教』『弟子』における子路の形成——李俄憲(『現
代社会文化研究』№16 一九九九年十二月)

『中島教の「古俗」二篇と『弟子』』李俄憲(『解釈』第四十六巻第七・八
号 解釈学会 二〇〇〇年八月一日)

『中島教』『弟子』試論——仁科路易子(『立教大学大学院日本文学論叢』創
刊号 立教大学大学院 二〇〇一年三月二十五日)

『村田秀明著『中島教』の創造』山下真史(『解釈と鑑賞』第六十
八巻九号 二〇〇三年九月一日)

*本稿は徳島大学大学院修士論文に加筆修正したものである。執筆過程、
および修論発表後に数々の御指摘・御指導を頂いた有馬卓也先生をはじめ
とする諸先生方に、心より御礼申し上げます。